

上 村 勝 彦

仏典にはありとあらゆる神々、半神たちが登場する。ほんの一例をあげれば、『法華経』の中の一章にすぎない「普門品」(観音経)の中でさえ、天(帝釈天、梵天、大自在天、毘沙門天など)、竜、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、あるいは羅刹などの神や鬼霊たちの名があげられている。その大部分は、インド神話において華々しい活躍をする、バラモン教やヒンドゥー教の神々、あるいは半神たちである。

天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽は特に(天竜)八部衆と呼ばれている。天はサンスクリット語のデーヴァ(*deva*)の訳で、神々のことで

ある。帝釈天(インドラ)、梵天(ブラフマー)、大自在天(マヘーシヴァー)、毘沙門天(ヴァイシュナヴァナリクベーラ)などを指すが、デーヴァについてはまた後で触れることにする。竜はナーガ(*naga*)の訳で、蛇、特にコブラのことである。夜叉はヤクシャ(*yaksha*)の音写で、薬叉と音写されることもある。おそらく民間信仰にその起源をもつ鬼神であるが、恐ろしい反面、非常な恩恵をもたらす場合もある。財宝の神クベーラ(毘沙門天)の配下とされる。夜叉とともに恐れられた羅刹(ラクシャサ、ラクシャス)は、すでにインド最古の文献『リグ・ヴェーダ』に出る悪魔で、後に食人鬼のイメージが定着し

た。次に乾闥婆はガンダルヴァ(*gandharva*)の音写である。ガンダルヴァはイランのアヴェスター聖典に出るガ

ので、ここでは特に阿修羅について述べたい。

ンダレーヴァ(*gandharva*)に対応するから、この半神の起源はインド・イラン共同時代に遡る。初期ヴェーダ文献においては、ガンダルヴァは神々に仕える半神で、天界の神酒ソーマの番人であり、水の妖精アプサラスを妻とする。後代、インドラ(帝釈天)の宮廷に仕える天上の音楽師とされた。阿修羅(*asura*)については後に詳

ある。阿修羅はサンスクリット語のアスラ(*asura*)の音写である。仏教、ヒンドゥー教一般ではアスラは神(デーヴァ)に敵対する悪魔の代表で、絶えず闘争をするという血なまぐさいイメージがそれにつきまとう。わが国でも、「修羅道」、「修羅場」、「修羅の巷」、「修羅物」というような表現が一般に定着した程である。

述する。迦楼羅はガルダ(*Garuda*)の音写であり、金翅鳥とも訳される。ガルダは伝説上の巨鳥で、竜(蛇)を食べるとされる。緊那羅はキンナラ(*Kinnara*)の音写であり、財宝の神クベーラに仕え、音楽を奏する半神の一種である、身体は人間であるが馬頭を有する。あるいはその反対であることもある。摩睺羅伽はマホーラガ(*mahoraga*)の音写であり、大蛇を意味する。おそらくニシキヘビを神格化したものであろう。

『リグ・ヴェーダ』においても、アスラはすでに悪い意味を持つこともあり、ヴェーダ文献の後期には、アスラが神に対立する悪魔であることは常識になっていた。例えば、『タイッティリーヤ本集』(六・二・三・一一二)に、アスラたちの鉄・銀・金よりなる三つの城塞を神々が包囲して、ルドラ神が矢を放ってこれを破壊したという神話がある。尤も、この神話では、後のヒンドゥー教で最高神の一つとなるルドラ(シヴァ)が主役を演じ、またシヴァと並んで後に最高神となるヴィシュヌも登場するから、この神話はヴェーダ神話からヒンドゥー教神話へ

『仏像散策』、『仏教語源散策』正・続、いずれも東京書籍刊

移る過渡的段階を示しているものであり、シヴァの重要性

が次第に高まって行く、かなり後代に成立したものである。この神話は、ヒンドゥー教文学において、シヴァの三都（トリプラ）の破壊の物語として発展するが、それについては拙著『インド神話』四三頁以下を参照されたい。

ヒンドゥー教の叙事詩において、アスラは神々の敵役として大活躍する。例えば『マハーバーラタ』の、有名な大海攪拌神話において、神々とアスラたちは、不死の飲料アムリタ（甘露）をめぐる、熾烈な争奪戦を展開する。

太古、神々とアスラたちは、アムリタを得るために大海を攪拌した。彼らはマンガラ山を攪拌棒にし、大蛇ヴァースキをそれに巻きつけ、亀王アクーパーラを支点として山をそれにのせ、大蛇の両端を引っぱった。ヴィシュヌ神が首頭を取った。大海から太陽と月が出現し、それからシュリー女神（吉祥天）が現われた。（シュリーはヴィシュヌの妃となる）それから酒の女神（スラー・デーヴァー）、白馬ウツチャイヒシュラヴァス、宝珠カウストウバ（ヴィシュヌの胸に懸る）が次々と現れ、最後にアムリ

タを入れた白壺を持つダヌヴァンタリ（神々の医師）が出現した。悪魔（この場合、アスラのこと）たちはアムリタを独占しようと企てた。そこでヴィシュヌは幻術を用いて美女の姿になり、悪魔を魅了してアムリタを奪った。悪魔たちは集結して神々を攻撃した。この間、神々はヴィシュヌからアムリタをもらって飲んだ。ところが、神々がそれを飲んでいるうちに、ラーフという悪魔が、神になりすましてアムリタを飲み始めた。しかしそれが彼の喉まで達した時、太陽と月に告げられたヴィシュヌはラーフの頭を円盤で切り落した。ラーフの頭だけがアムリタの効力で不死となって残り、告げ口した太陽と月を恨み、今日にいたるまで太陽を追いかけて日蝕と月蝕をひき起こすのである。（『マハーバーラタ』一・二五―一七）

『マハーバーラタ』にはまた、天女ティローッタマを争って殺しあつたアスラの兄弟の話が見出される。

スنداとウパスンダという、非常に仲のよい兄弟のアスラがいた。二人は成長すると全世界を征服しようと企て、激しい苦行を行った。神々の妨害にもかかわらず、彼らは梵天（ブラフマー）の恩寵を得て、お互いに兄弟を

除いて、いかなるものにも殺されぬものとなった。二人は魔軍をひきつれて、神々の世界に攻めこんだ。神々は梵天界に避難し、彼らは全世界を征服した。梵天は二人を殺そうと企て、ヴィシュヴァカルマン（毘首羯磨）に命じ、三界における美しいものを集めて、ティローッタマという美女を造らせた。一方、二人のアスラは、地上を征服し対抗する者がいなくなると怠惰となり、種々の享樂にふけていた。ある日、彼らが高原で遊んでいるところに、ティローッタマは、一枚の赤い布だけをまとって現われた。兄弟は彼女への愛欲に我を忘れ、棍棒で撃ちあつて二人とも死んだのである。（『マハーバーラタ』一・二〇―二〇四）

これらの神話についての詳細、及び関連するその他の神話については、やはり『インド神話』を参照されたい。

以上、若干の神話について見たように、アスラは代表的な悪魔で、しばしば他の悪魔（ダイティヤ、ダーナヴァ）と同一視されている。しかし、『リグ・ヴェーダ』の古層では、アスラは決して悪魔ではなく、至高の神的存在

であつた。ヴァルナ（水天）とミトラという、しばしば対をなす二体の偉大な神が代表的なアスラであつた。その他、単に「アスラ」と呼びかけられる謎の神格も存在する。これに対し、『リグ・ヴェーダ』で最も重要な役割を演ずるインドラ（帝釈天）は代表的なデーヴァ（「天」と漢訳された）である。後代、デーヴァは神とされ、アスラは悪魔とみなされるようになった。

ところで、アスラを語るには、古代インドのヴェーダ聖典とともに、古代イランのゾロアスター教の聖典であるアヴェスターをも対照しなければならない。

游牧生活を送っていたアーリヤ民族のうち、西方に移住した諸部族はギリシア人、ローマ人など、ヨーロッパ諸民族の祖となった。東方に移住した諸部族は、インドとイランの地に入ったが、分かれる以前に、ある程度の期間共同の生活を送り、かなり高度の文化を形成していた。そのうち、インドに入った人々はヴェーダ聖典という、またイランに入った人々はアヴェスター聖典という、一連の宗教文献を信奉していた。ヴェーダの中でも最古のものが『リグ・ヴェーダ本集』である。その言語

及び内容は、アヴェスターのそれと驚くほど類似している。『リグ・ヴェーダ』の成立時期は、一般に西紀前一二〇〇年前後とされているが、それよりも古いとする傾向も強い。

一方、アヴェスターはゾロアスター教の聖典である。ゾロアスター(ザラスシュトラ)の年代は不明とされるが、近年では西紀前一〇〇〇年以前とする説が有力となっているようである。ゾロアスターは従来のイランの宗教(『リグ・ヴェーダ』の宗教に酷似したものであったろう)を改革して、ゾロアスター教を創始した。アヴェスター諸文献のうちでもガーサーの部分は古く、ゾロアスター自身の作とされている。

アヴェスターにおいて、インドのデーヴァ(Deva)に対応するのはダエーヴァ(Daeu)であり、アスラ(Asura)に対応するのはアフラ(Ahura)である。ところが面白いことに、イランでは、おそらくゾロアスターの宗教改革の結果、インドと逆の現象が起り、アフラが高位の神とみなされ、ダエーヴァが悪魔となった。特にアフラ・マズダーはゾロアスター教の最高神となった。後代のイン

ドでは、すでに見たように、アスラは悪魔となったが、本来「生氣」、「活氣」を意味すると思われる一つの言葉であった asura が a と suia に分けられ、「神(Sua)で無い(é)者」と通俗語源解釈され、「非天」と漢訳されるようになった。あるいは、「酒(Sua)の無い者」と解釈し、「無酒神」と漢訳されることすらあった。

アスラⅡアフラのうちで、インドとイランに共通の名を有する神格は、ミトラ(Mitra)Ⅱミスラ(Mithra)のみである。『リグ・ヴェーダ』におけるミトラ(おそらく「契約の神」)はヴァルナと一対で讃えられることが多く、単独としてはあまり重要な神ではないが、ミスラの方は西方にその信仰が伝えられ、中近東方面に遠征したローマ軍兵士の信仰を受けて、西紀初頭のローマ帝国で広く崇拜されることとなる。

ヴァルナ(Varuna)は宇宙の秩序と人倫を支配する司法神である。彼は天則リタ(Rita)の守護者である。リタはアヴェスター語のアシャ(asa)に対応し、それによって天体が正しく運行し、昼夜、歳月が定期的に循環するところのものである。それはまた道德の法則であり、それ

は真実(satya)である。ヴァルナはスパイを用いてあらゆる場所で行々の行為を監視し、リタにそむく者を捕縛して水腫病にかからせる峻厳な神であるが、深く悔い改め許しを乞う者に対しては慈悲深い神となる。彼は後代には単なる水の神、海上の神(「水天」と漢訳される)となるが、水との関係は最初から強く、その住処は最高天の「天水」の中にあるとされる。水の神としての性格を重視し、彼をアパーム・ナパート(水の息子)という神格と同一視する説も出されている。彼の名はインドラや、対をなすミトラの名とともに、西紀前一四世紀中葉のミタニ・ヒッタイト条約文に挙げられているから、メソポタミアにおいても信仰の対象であったと推定される。彼はインド・イラン共同時代における至高神の一つであったと思われる。

それにしても、これほど重要なアスラに対応するアフラの名がイラン側に見出されないのは不思議なことである。一般にヴァルナはゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーに対応すると考えられている。しかし、アスラがアフラに、ミトラがミスラに、水の息子アパーム・ナ

パート(Apāh Napā)がアボム・ナパート(Apām Napā)にというように、ヴェーダとアヴェスターの神名がよく一致する例が多いのに、ヴァルナに対応する神名がイランにないのは何故であろうか。それは、ヴァルナがあまりにも至高の神であったため、直接固有名で呼ぶことを憚って、「賢き主」(Ahura Mazda)と呼んだのである、と説明されている。

辻直四郎博士はこの説に従って、次のように述べられる。

「ヴァルナの神性は、アヴェスターの最高神アフラ・マズダーに対応するとされるが、ミトラはアヴェスターのミスラに相当する。ミスラとアフラとが共に両数形で並び立つとき、まさにリグ・ヴェーダのミトラ・ヴァルナウ(共に両数)に呼応する。」(『インド文明の曙』五四頁)

しかし、ヴァルナとアフラ・マズダーとの同一説に対して異を唱える研究者もいる。特にイギリスのイラン学者M・ボイス女史の説は注目に価する。彼女はイランとインドの三体のアフラ(アスラ)のバラレルな関係に注目し、それぞれの機能を構造的にとらえて、従来の説と

は異なる斬新にして説得力のある学説を提唱した。その説に従えば、両数形で出されるミスラとアフラの場合、その「アフラ」こそ実はヴァルナであるということになる。アフラ・マズダーは決して単に「アフラ」と呼びかけられることはないのである。彼女の説は極めて注目に価するものであるので、この機会を利用して、その大著『ゾロアスター教の歴史』の一部(M. Boyce, *A History of Zoroastrianism*, Vol. I, Leiden/Köln, 1975, pp. 47—51)を紹介することにする。なお、「」内は紹介者の補足である。

ヴァルナに対応するアヴェスタ語は、「ヴォウルナ」(*Vouruna)であると推定されるが、イランには「ヴォウルナ」と呼ばれる神はいない。しかし、このように重要な神で、そしてミトラと密接に結びついた神が、イランで忘れられたというのは、あり得ないことのように思われる。そこで、一般的には、ヴァルナはあまりにも至高の神なので、信者たちは直接その名称で呼ぶことを遠慮し、その代りにアフラ・マズダー(「賢き主」の意)と

呼びかけたのではないかと想定されている。やがて時が経つにつれて、彼の本来の名は忘れられ、アフラ・マズダーという呼称だけが残ったとされる。そのような展開は有り得ぬことではなく、本来の名が呼称でおきかえられるということは、他のイランの神々の場合でも、例のないことではない。

しかし、この一般的な解釈に対する異論もかなり多い。イランのアフラ・マズダーはゾロアスター以前から、ミスラよりも高位の神と認められていたようである。インドのヴァルナはミトラ(イランのミスラ)と一対をなす同格の神であるが、アフラ・マズダーはより高い神であるから、ヴァルナに対応しないと考えられる。

ところで、『リグ・ヴェーダ』の中には、ヴァルナとミトラより高い存在である、無名のアスラが登場する。例えば、
「我等の父、アスラは、水を下に注ぎ……」(五・八三・六)

「あなた方(ミトラとヴァルナ)は、アスラの幻力(ēta)により、天をして雨を降らせる。」(五・六三・三)

「あなた方(ミトラとヴァルナ)は、アスラの幻力(ēta)により、掟(vata)を守護する。真実(ta)によりあなた方は宇宙を支配する。」(五・六三・七)

「この無名のアスラは、ヴェーダ学者によつては、一般に天空神ディヤウス、あるいは雨神・バルジヤニヤと同一視される。例えば、辻直四郎博士の訳では、五・八三・六の「アスラ」はバルジヤニヤを指すとされる。しかし、ボイス女史によれば、そういうヴェーダ学者は、「イランのバラレルを照会していない」という。」

この無名のアスラは、ミトラとヴァルナよりも高い存在であり、まさにアフラ・マズダーに対応する神であると考えられる。『リグ・ヴェーダ』三・三八に出る、ヴァルナとミトラの上に立ち、宇宙創造をする「アスラ」もアフラ・マズダーに対応するものであるとすることが出来る。辻訳、三〇四—六頁参照のこと。」

ところで、「マズダー」(あるいはインドにおけるその対応名)は、実際にこのヴェーダの無名のアスラの失われた固有名であったであろうか? 「それに関し、「マズダー」という語についての研究史を概観する。」

マズダー(mazda)という語の曲用は不規則であり、その語幹がmで終るといふ説とdで終るといふ説が対立していたが、いずれの説も、この語は「賢い」という意味の形容詞であるとする点では一致していた。しかし、十九世紀の終りに、A.V.W. Jacksonは、マズダーを実名詞として、ヴェーダの女性名詞メーダー(medha, "mental vigour, perceptive power, wisdom")に対応させた。そしてアフラ・マズダーを「Lord Wisdom」(叡知なる主)と解釈した。

この説はあまり論議を呼ばなかったようであるが、その後、Sten Konowが再び同様の解釈を提唱した。彼によると、ヴェーダの medha は "insight", "wisdom", "prudence" という意味である。抽象名詞であるが、このような語は一般に独立の存在を持つ力とみなされる。この「人生における重要な要素として尊重された」古いアーリヤ語が、イランの最高神の固有名となったのである。ヴェーダの側にはこの概念の神格化は認められないので、最高原理としての mazda を最高神 (Lord Mazdā) としたのは、ゾロアスター自身の靈感であったと、Ko-

now は想定した。

この説に対する反論も存する。アフラ・マズダーは、明らかにゾロアスター以前に崇拜されていた古い神であったというのである。しかし、P. Thieme は「若干修正しつつもこの説を支持している。そして彼は、アフラ・マズダーに対応するインドの神は、『リグ・ヴェーダ』の無名ではあるが至高のアスラであると主張した。また文法的には、マズダーの曲用における不規則は男性神に属する固有の曲用を女性の抽象名詞のそれから区別しようとする試みから生じたとして、Konow 説を援護した。māda という語は“memory, recollection”を意味する名詞として、古いアヴェスターの中に一回あらわれる。また“fix in one's thoughts”という意味の準動詞として二回あらわれるという。しかしゾロアスターの改革の結果、そのような一般的な使い方はされなくなった。つまりアフラ・マズダーに対する崇敬の念が非常に高まり、彼の名は特別に神聖視されるようになったのである。

この、『リグ・ヴェーダ』の無名のアスラ、父なる神が

アフラ・マズダー (Lord Wisdom) であるとする説は、少数の学者の支持を受けている。「ボイス女史もその支持者の一人であることは言うまでもない。」しかし、このアスラは、何故に『リグ・ヴェーダ』期において無名となるほど、すでにそのように「遠い存在」となったのであろうか？「ボイス女史は次のような仮説を立てる。」神々と人間の両者が世界を創造し維持するに必要な、基本的性格のものである叡知 (wisdom) は、根元的で遍満する性格のものである。だから、一方では“Lord Wisdom”は、イラン人の間では至高となり得たが、他方、インドでは、「それはあまりにも普遍的・抽象的な存在であったが故に」、日常の信仰から遠ざかった孤高の存在となり、時が経つにつれその名は忘れ去られたのである。「イラン側でマズダーの名が隠れなかったのは、他ならぬゾロアスターの改革の結果、それが最高神の名として定着したからだということになる。」

かつてインド人がアスラ・「メーダー」(Asura Medha Ⅱ Ahura Mazda) をアスラとして崇拜した、という仮説を承認するとすれば、ヴァルナはどうなるのであろう

か。イランにはヴァルナに対応する神はいなかったであろうか。しかし、ヴァルナはゾロアスター以前のイランにおいて、アフラ・マズダーと別個の神として崇拜されていただけでなく、今日のゾロアスター教徒によっても、別名で崇敬されているという可能性がある。「ここで、ボイス女史は、イランの水の神アポム・ナパート (Apam Napāt)、ヴェーダのアプーム・ナパート (Apām Napat) — 「水の息子」という意味 — が、実はヴァルナの別名であったとする説を主張する。」

ゾロアスター教におけるアポム・ナパートの地位は曖昧であり、一見あまり重要な神でないように見える。ただ、水に祈念する時、いつもアポム・ナパートがそれとともに祈られる。更に、ミスラが朝の守護神であるのに対し、彼は午後の守護神とみなされる。であるから、この神は外見は曖昧であるが、ゾロアスター教における重要な神とみなされる。

アヴェスター諸文献においても、この神は曖昧で、他のより顕著な水の諸神と関連して言及される重要でない神であるが、しかし、同時に、古い時代においては、水

と関連するだけでなく、非常に偉大な神であったということがうかがわれる。実際、彼はアフラ・マズダーとミスラ以外で、「アフラ」と呼ばれた唯一の神である。そして、ミスラとともに、人間の世界における秩序を維持するアフラの仕事を分け持つ神であった。またこの二名のアフラは共同で「繁栄」(Khvaranah) を邪悪な所有者たちから守護する。ミスラは火と結んで、アポム・ナパートは水と結んでこの仕事を行う。

「つまりこの神はミスラと対をなす神であった。ヴェーダにおいてミトラと対をなす神はヴァルナである。だから、この神は実はヴァルナではないかと考えられる。」

アポム・ナパートに関するゾロアスター教の資料は、ヴェーダのヴァルナに関する記述と比べると、量的にはわずかであるが、それにしても本質的にそれと一致する。二名のアスラ、ミトラとヴァルナと、二名のアフラ、ミトラとアポム・ナパートの概念は、驚くほど類似している。アポム・ナパートは悪しき行為を抑止するが、それはまたヴァルナの特徴的な機能でもある。

アヴェスターのアポム・ナパートと、ヴェーダのヴァ

ルナとは明らかに同一の神であるように見えるが、しかし困ったことに、ヴェーダにおいて、アパーム・ナパートはヴァルナと別の神とされる。だが、このヴェーダの「水の息子」もまた、イランの同名の神と同じく、曖昧な神格である。この神もまた一見重要でない神であるように思える。『リグ・ヴェーダ』においては、ただ一つの独立讃歌(二・三五)のみがこの神に捧げられている。ただし、その中で、彼は口を極めて讃美されている。特に、

「主アパーム・ナパートは、そのアスラの力により、一切の生類を創造した。」(二・三五・二)

これはアヴェスター文獻に述べられている讃歌と驚くほどよく似ている。

ヴェーダのアパーム・ナパートは「駿馬を鼓舞する者」(ashvanan)と呼ばれている。アヴェスターでは、この神は「駿馬を有する」と呼ばれる。波を御する水の神をこのように表現することは、ギリシアのポセイダンの場合と同様である。しかし、ヴェーダにおいては、「駿馬を鼓舞する者」(ashvanan)は、アパーム・ナパートと同一

視される火の神アグニの呼称の一つである。『リグ・ヴェーダ』の多くの箇所では、この神はアグニと同一視される。「辻博士もこの神について、「リグ・ヴェーダの示すかぎりでは、火神アグニの一形態、特に水中のアグニの特相を代表し、また地上の祭火として讃えられる。神話的内容もアグニの特徴を踏襲し、両神は区別されつつも強く同化の傾向を示し、ときには全く同一視されている」(『リグ・ヴェーダ讃歌』七三頁)と述べている。」

しかし、イランのアポム・ナパートが火の神であるという例はない。アパーム・ナパートとアグニとの同一説は決定的なものではなく、ヴェーダ学者の間にも多くの議論のあるところである。『リグ・ヴェーダ』の他の箇所には、アパーム・ナパートはアグニと別の神とされ、あるいはそれは単なる水の神であり、他と同一視する余地のない場合もある(例えば、七・四七)。

これに関連し、火の神がどうして水の神と結びつくのかという問題を検討する。

H. Oldenberg は、稲光と雨雲との関係により火と水が結びつくとする説を退け、植物と水との関係を重視す

る。水により植物が生じ、植物で火おこし棒が作られ、それにより火が発生する。それ故、水は火を生じさせる潜在力であるとみなされる。更に、火が水で消えるのは、

火が水の元素に帰入すること、すなわちその中に住することであると考えられる。これらの現象についての思弁の結果、すべての水はそれ自身の内部に火を持つとみな

される。アパーム・ナパートは元来、インド・イラン共同時代の「水の霊」(Wasserdämon)であり、アグニとは全く別の神格であったが、その結果アグニとの混合(coin-

tination)が起り、ヴェーダのアパーム・ナパートは火の神と混り合った特徴を得、更にアグニと水との関連が強調され発展したのである。しかし、祭式においては、アパーム・ナパートはイランの同名の神と同じく、水と

関係するのみであるとする。

この Oldenberg 説により、ヴェーダにおけるアパーム・ナパートの概念の変化が十分に説明され得るように思われる。ただし、彼の説に一つだけ修正を施す必要がある。彼の言う、名の知られていない「水の霊」の代りに、偉大なヴァルナ、「水の子」(apam sishu)を代置す

べきなのである。この解釈を直接的に支持する、少なくとも二つの詩節が『リグ・ヴェーダ』に存する。

「汝、アグニは、生まれる時ヴァルナである。汝は、燃え上る時ミトラである。力の息子たる汝の中に、すべての神々がいる。」(五・三・一)

つまり、「生まれる」時、アグニはヴァルナであり、「水」(即ち、木の棒)から燃火に移った時、彼はミトラと「なる」というのである。

「汝は眼となり、偉大な¹の守護者となる。汝はヴァルナとなり、かくて²の代表者となる。汝は『水の息子』となる。おお、ジャータヴェーダスよ。」(一〇・八・五)

ここではヴァルナとアパーム・ナパートが同一神とされ、それとアグニとが同一視されている。

アグニとアパーム・ナパートとの同一視が恒常的なものでないことは、少なくとも一つの『リグ・ヴェーダ』讃歌において、サヴィトリ神がまたアパーム・ナパートと呼ばれているという事実からも証明される(一・二二・六、また一〇・一四九・二参照)。サヴィトリ「鼓舞者」

の意。辻訳三三頁以下を見よ」は太陽と不可分の関係にあり、太陽が海に沈む時、それは地下に横たわる。だから、

「太陽が水に沈む時、それはヴァルナとなる」と言われる。別の言葉で言えば、サヴィトリはアパー・ム・ナパートとなる。アグニが日々水から生じて、日々「ヴァルナになる」ように、サヴィトリも、夜、その中に下って、「水中に住む」神、かの強力なアスラ、と同一視されるのである。

「サヴィトリが「アスラ」と呼ばれる（辻訳三三頁参照）のも、ボイス説に従えば、それがヴァルナ・ナパート・ナパートと同一視されているから、ということになるう。」

ヴァルナは恵みの雨を降らせるといふ点で、水の神の特徴をとどめていた。これはまた、イランのアポム・ナパートの特徴的な機能でもある。後代、ヴァルナはもっぱら水の神とされ、「水の神、海上の神、インドのネプチューン」となった。同様に、イランにおいては、アポム・ナパートと水との関係が深まったのである。現存の

資料では、決定的な証拠はないが、ヴェーダとアヴェスターとの資料を照合すれば、インド・イラン共同時代において、アパー・ム・ナパート（「水の息子」）が、誓約の神であったヴァルナの呼称であった可能性は強いと思われる。そして、そうだとすれば、イランのアポム・ナパートは、アフラ・「ヴォウルナ」（Ahura *Younna）がこの古い呼称で崇拝されたものである、とみなしてよいことになる。

この解釈がほぼ確実と思われるのは、それによりヴェーダとアヴェスターの偉大な三神がそれぞれバラレルな機能を果たしているという構造が確立されるからである。両方の側において、Lord Wisdom は三神のうちで最高であり、孤高であり、非常に強力で、何ものにも限定されざる神である。そして彼の下に、彼の命令を遂行しつつ、均しい力を持つ強力なる一対の神、すなわち、ミスラ・ミトラと、「ヴォウルナ」・アポム・ナパート・ヴァルナ・アパー・ム・ナパートが控えていた。

『リグ・ヴェーダ』の時代には、すでにアスラ・「メーダー」は遠い神となり、忘却されていたようである。や

がて、他の二名のアスラたちも同じ運命をたどる。「ヴァルナは高位のアスラではない単なる「水天」となり、ミトラも影の薄い存在となった。」しかし、ゾロアスター教では、今日でも三神すべてが崇拝されている。

それにしても、「ヴォウルナ」はゾロアスターの改革により、最大の被害を蒙ったようである。インドではヴァルナはミトラよりも高位であったが、イランでは反対に、すでにゾロアスター以前から、ミスラの方が高位となったので、「ヴォウルナ」の影が薄れたのだと想定することは容易である。しかし、実は古代イランにおいて、「ヴォウルナ」は、インドのヴァルナと異ならぬ高位に

いたのである。古代イラン人が「アフラ」と呼んだ時、それはアフラ・マズダーではなく、「ヴォウルナ」であった。というのは、マズダーが「アフラ」という称号なしに祈られることは稀であり、そして「アフラ」とだけ呼ばれたことは決してない。「アフラ」という称号のみで呼びかけられた唯一の神は「ヴォウルナ」・アポム・ナパートであり、通常「高き主」（*ahura bərənā*）と祈られる。 *mihra ahura bərənā* という句は、「高き

主であるミスラ」と解すべきでなく、「ミスラと高き主」と、並列合成語（*dvandva*）として理解されるべきである。

ahuradātā（アフラにより創造された）という形容詞が存在し、二つの名詞、*zam*（大地）と *vanahra*（勝利）を修飾する。一般には、この形容詞の「アフラ」は万物の創造者であるアフラ・マズダーであるとされる。しかし、元来、この「アフラ」はインドのヴァルナに対応する「ヴォウルナ」を意味した。おそらくこのことが、ゾロアスター教において彼が衰微した理由の一つであろう。つまり、ゾロアスターの改革により、アフラ・マズダーのみがすべてのよきものの創造者であるとされた時、「ヴォウルナ」は自己の特徴的な機能の一つ「創造者の機能」を奪われ、主として水の神として生き残った。一方、審判者であり、監視者であるというミスラの役割は、ゾロアスターの教えによってあまり影響を受けなかった。そこで彼の地位は変らずに残ったのである。「つまり、ゾロアスター以前において、「ヴォウルナ」が創造者の機能を持ち、ミスラよりも高位の神であったからこそ、ゾロアスターの改革以後、すなわちそ

の機能がアフラ・マズダーに移行した後は、影の薄い存在となったのである。」

非常に古いアヴェスター『ヤスナ・ハプタンハーイテイ』(Yasna Haptanhaiti)において、「アフラ」すなわち「ゾロアスター」からアフラ・マズダーへの信仰の推移のあとをたどることができる。この文献は現存の形では明らかにアフラ・マズダーに捧げられているが、それは改竄の結果であり、元来、祈禱の対象は、水の神と火の神という二体のアフラであった可能性が大きい。改作にもかかわらず、ゾロアスター以前の古形を残している。アフラ・マズダーは「罰すべく定めた者を害する者」(三六・一)と呼ばれている。これはミスラや「ゾロアスター」にこそふさわしい言葉であり、アフラ・マズダーにはふさわしくない。同様に彼は *humāy* 「よき幻力を持つ者」(四一・三)と言われる。更に驚くべきことに、水が「このアフラの妻たち (*alutru*) と呼ばれている (三八・三)」。これは『リグ・ヴェーダ』で水がヴァルナの「妻たち」(*varuṇā*) とされる (二・三二・八、七・三四・二二) のとパラレルな考え方である。このことから、ゾロアスター

以前には、「アフラ」は「ゾロアスター」のみを意味したことがわかる。

以上でボイス女史の説の紹介を終えるが、イランとインドの三神の対応関係を図示すれば次のようになる。

(イラン)	(インド)
Ahura mazdā	Asura *Medhā
Ahura Mithra	Asura Mitra
Ahura *Vouruna =	
Apām Napāt	Asura Varuṇa =
	Apām Napāt

この説は従来のインド学者の説に慣れ親しんだ者にとって、一見奇抜なものに見えるが、こうしてイランとインドの古い文献を駆使して、三神のパラレルな性格を鮮やかに示されると、確実性のある説のように思われる。ここではその梗概しか紹介できなかったが、ボイス女史の主張の一つ一つは、適切な資料によって厳密な手

続きを踏んで論証されており、説得力がある。この説は決して想像により恣意的にでっち上げられたものではない。尤も、ヴェーダもアヴェスターも、観点を変えて読めばかなり自由な解釈を許す部分が多く、ボイス女史に対する反論もかなり多いようではある。しかし、否定するにせよ肯定するにせよ、ヴェーダ学者の側もボイス女史の説を無視することは出来なくなっていると思われる。

それにしても、ボイス女史の大著は、すでに一九七五年に出版されたものである。従ってこの説は、イラン学者やヴェーダ学者には周知のものであり、今さら門外漢が紹介するまでもないと思われるかも知れない。しかし一般に奇妙な新説が堂々と流布しているのを見ると、新説を発表するなら女史のような正当な文献学的手続きを踏んでもらいたいと念願し、あえてこの機会に一般に紹介するものである。インドとイランの古典に関する常識もなしに、大胆な説を開陳する文人の臆面のなさもさることながら、そのような暴論を許容する研究者の側にも反省の余地があり、可能な限り自己の研究成果を一般に

公開する努力が必要とされるであろう。

(かみむらかつひこ・国学院大学助教授)